

親が育てば子どもが育つ

— 脳科学に基づく親学の勧め —

明星大学人文学部

高橋 史朗

この記録は、呉大学看護学部公開講座（日時：2007年10月1日 場所：呉市呉阪急ホテル）の録音から起こし、高橋史朗先生のご協力を得て編集したものです。

■ 生きているということ

皆さんこんにちは。

はじめに、「いきいきわくわくしていますか」という質問をさせていただきます。選択肢は簡単です。3つです。「いきいきわくわくしていますか」「いきいきわくわくしています」「普通です」「いきいきわくわくしていません」のこの3つから選んでください。周りを見ないで手を上げてください。「いきいきわくわくしています」という方どうぞ。少ないですね。「普通ぐらいです」という方どうぞ。圧倒的多数ですね。それでは、「いきいきわくわくしていません」という方どうぞ。ちょっと勇気がいりますが、5名ほどいましたね。

私は必ずこの質問から大学の授業を始めますが、その結果は全然信用していません。1年間学生を見ていると、全然一致しないのです。いきいきわくわくしていませんと答えた人にいきいきわくわくしているケースが多いのです。最初に手を上げた女子学生は死んだ魚のように一日中ボーとしていました。でもいちばん最初に手を上げたので、ほとんど信用していないのです。5歳の女の子に同じ質問をしたら、こう答えました。「私、5年も生きていて疲れちゃった」と言ったのです。退職した校長先生のようなことを言うのです。どうしちゃったかと思いました。

あるいは、先日、埼玉県で聖路加病院の日野原先生と一時間ずつ講演をしました。今日のような

一般公開の講演会です。控え室で話をしていたら、101歳まで、週3日、講演が入っているというのです。この人は101歳まで、生きるつもりかとびっくりしました。それから、100歳になるとネパールで小沢征爾さんと誕生祝いのコンサートをやるといいます。みなさん96歳になったら5年後まで、講演をいれますかね。健康に自信がないから僕は絶対にいれません。ところが、日野原先生とお昼をご一緒しましたら、お昼はミルク一杯とビスケット1,2枚です。「朝食は？」と聞きましたら、「ジュース一杯です」。私と一緒に足を上げましたが、私よりも高く上がりましたね。元気一杯です。小学生に講演をしにいくのを聞きにきました。最後は校歌の指揮をとりまして、最後はゴー、ゴー、ゴーと言って帰って行きました。子どもたちは啞然であります。こんなに元気な曾おじいちゃんが日本にあふれていたなら、日本の子どもたちはもっと元気になるでしょうね。一般公開でしたので、どんな方が来ていらっしゃるのかなと思って見ていましたところ、70歳代のおばあちゃんが多かったですね。ああ、日野原スターがいるのだと思って、たぶんこれらの方の主人はもう元気はないのではないかと思いながら聞いていました。

この講演はとても素晴らしい講演でした。日野原先生と私は一度も打ち合わせをしなかったのですが、不思議なことに、最後の結論は見事に一致したのです。日野原先生は神谷美恵子という方の

お話を最後にされて、「一番大事なものを失った時にはじめて磨かれる感性というようなものがある。一番大事なものを失った時にはじめて気づく世界がある」という話をされました。一番大事なものは何かと言いますと、健康ですね、あるいは、肉親ですね。自分が健康を損ねた時、肉親を失った時気づく世界があるというお話をされました。実は、私は大学のゼミでいつも障害者の施設を訪ねることを二十数年間やっています。障害児と関わることによって学生が何かに気づいてくれる、私は感性と言っているのですが、それを大事にしているのです。最後の結論がそこで、見事に一致しました。

■ 親が子どもを育てるということ

8月の末に我が家で今年3月に卒業した学生の同窓会をやりました。日頃私は旅ガラスのようにいつも飛び回っているものですから、ファミリーのような付き合いをしようということで、できるだけ学生を25畳の日本間に招いて、同窓会を今年もやりました。「皆さん近況報告をしてください」と言ったのですが、一人暗い顔をしている卒業生がいるのです。「おい、どうしたんだ」と言ったら、「僕、最後に挨拶します」というのです。そして、何を言ったかという、小学校3年生の担当の教師になったのですが、もう、やめたのです。4月、5月、6月、7月のわずか4カ月で教員をやめました。私の教員生活の中で初めてのことです。それから、去年は1年目で2人やめました。これも、初めてのことです。3人とも理由は共通しているのです。これは2つあります。1つは子どもの発達障害ですね、LDとかADHDとかいう発達障害の子どもにどう対応していいかわからない。今、6%ぐらいいるとすると、1クラスが40人学級だと1クラスに2人ぐらいの割合になりますね。

その子どもたちにどう対応していいかわからなかった。そして、それに対して、親が理不尽なことを言うてくる。その親に対して、どう対応していいかわからなかった。この子どもの変化と親の変化にギブアップしてしまい、休職に追い込まれてしまったのです。

今、世の中は平和だけれども、私は教え子を戦場に送りだしているような気になっているのです。でも、同窓会には来てくれましたから嬉しかった。本当は辞めようかなと思った時に悩みを相談

してくれればよかったのに、それもできなかった。とても悲しい思いをさせて申し訳なかったなと思ったのです。

今日は、「親学」というのが、大きなテーマですけれども、なぜ「親学」を始めたかという、理不尽な親が増えて来たからです。保育士に向かって、我が子の鼻水が流れているのを見て、鼻水がでていますよと注意した親がいます。鼻水をふくのは、保育士の仕事だと錯覚している親がいるのです。また、中学校の親が学校にやって来て、「うちの子が風呂に入らないので、入るように言ってほしい」と言うてきた。「それは、あんたが言いなさい」という話なのですが、親が親の責任を見失い始めている。

ほとんどの新聞が理不尽な親のことを一面で報道しました。これは、読売新聞の一面トップ記事6月18日付けのものです。40の教育委員会が身勝手な親の要求に苦慮していると言っています。保育園でも幼稚園でもこれが問題になっています。「子どもが鬼を怖がるから、豆まきが終わってから連れていきます」とか、いちいち挙げているときりがないのですが、保育園、幼稚園のケースではこんながありますね。「うちの子は箱入り娘に育てたい、誰ともけんかさせないと念書を提出しろ」と言うて来た、「幼稚園のスナップ写真でうちの子が真ん中に写っていないのはなぜだ」「子どもが一つのおもちゃを取り合ってケンカになるので、そのおもちゃをおかないでほしい」。小学校のケースでは、「石をぶつけてガラスを割ったのは、そこに石が落ちていたのが悪い」。何をか言わんやですね。「義務教育だから、給食費を払う必要はない」。現在、給食費を払わない人の総計は23億円になります。保育料を払わない人の分は90億円。この間、ある園に講演に行きましたら、園長がこう言いました。「今日、ここに来ておられるPTAの方はお金を払っている人たちです」「払っていない一団がいるのですか」と「はい、います」というのです。そして、払っていない親の一団が払っている親の一団に「あんた、払っているの」と言うそうです。

私はその話を聞いて、NHKの受信料のことを思い出したのです。NHKの受信料と同じ状態か、払う人と払わない人がいるのか、と思ったのです。義務教育だから給食費を払わなくてもいいと思っている人がたくさんいます。あるいは、中学校では、保護者がクレームを言いに来た時の休業

補償を支払えとかですね。夜中に電話で先生を呼び出して、飲食店での交渉に応じろとか、まあ、最近ではモンスターペアレンツ、怪物のような親というマスコミもでてきましたが、今まで教育は子どもだけの教育で良かったのですが、これからは、親に対してどう関わるかということが、とても大事になりました。東京都では、3分の1の教師が訴訟保険に入っています。親との訴訟が、頻発するようになったのです。

さて、今日質問表を出していただいて、講演会の前にこんなにたくさん質問表をいただいたのはあまりないのですが、やっぱり、問題意識の高い質問がたくさんありました。最初はこのような質問です。「親が成長しても、子どもとの接点がなければ意味がないのではないのでしょうか」。最近では親と子の会話が少ない家族が少ないのでから、まずは家族との絆を良くするという考えがなければいけないと思います。家族との絆が大切だという意見ですね。

20年前に子どもが描いた絵と最近の子どもが描いた絵を比較した本があるのです。『殺意を描く子どもたち』三沢直子という方の著者ですが、その中で、20年前の子どもと今の子どもとどこが違うかという、家の大きさが違うのです。20年前の子どもが描いた絵は家が大きいのです。しかし、最近の子どもの描いた絵は家が小さいのです。家が実際に小さくなったということではなく、心の居場所ですね。庭という字は心の庭という意味なのですが、これは、家庭の団欒、一家団欒、笑いがあるかどうかを意味します。今の家庭はハウスではあるけれども、ホームではなくなった。建物ではあるけれども、子どもにとって心の居場所ではなくなっている。家というのは本来、外でいじめられていやなことがあっても、家に帰ってきたらホッと安らぐところです。

今、家はそういう場所ではなくなった。幼稚園で掃除しなさいと言われて、無視していた子が親の声が聞こえてきたら、急に掃除を始めたというのです。親にとっていい子を演じ始めたというのです。家庭は親にとってのいい子を演じる場所になっている。心の安らぎの場所ではなくなっているのです。

私は「親学」の話を全国でやっているのですが、青年会議所というのは、30歳代の若者の組織なのです。その30歳代の若者が、講演会が終わったあとで私にこう言ってきました。「先生、親が変わ

れば子どもが変わるというのは、難しいです。親は年をとっているから、変わりません。子どもが変われば、親が変わります。こっちの方が早いのではないですか」「先生、方針を変えたらどうですか」と言ってきたのです。それも、一理あるので、私はお酒を飲みながら、「じゃあー親守り歌を作ろう」と半ば冗談で提案したのです。乳幼児は親に甘えないと生きていけない。弱者です。

その、弱者である乳幼児に子守り歌を歌いながら、実は幸せを感じるように人間は作られているのです。これを研究している人は有田秀穂という方で、東邦大学のお医者さんですけども、『セロトニン欠乏症候』という本を書いています。最近また本を出されたと思いますが、子守り歌を歌っている時にセロトニンがどんどん出てくるのですね。セロトニンというのは幸福感の源だと言われています。今日皆さんに「いきいきわくわくしていますか」と聞きました。なんとなく、いきいき、わくわくしている心が躍っている状態はセロトニンがどんどん出ている状態です。子守り歌を歌っている時に、すやすや休んでいる乳幼児の寝顔を見ながら、幸せを感じるように人間は創られたのです。

ところが、愚かにも、この国はどんどんと子育てで大事な乳幼児の時期に子育て代行をするようになって、今、私は政府の少子化対策重点戦略検討会議の委員をしていますが、東京都の公立保育園で、外国人の保育士を雇ったのです。なぜ、外国人を雇いましたかと尋ねましたら、「零歳児は日本語が分からないから外国人でいいのではないか」と言ったのです。私はびっくりしました。そこには、何が抜けているかと言いますと、子どもの成長、発達を保障するという視点が抜け落ちているのです。ベテランの保育士はお金がかかるから、解雇される。パートを雇う、外国人を雇う、これは、コスト削減策なのです。合理化や効率化が優先されている。零歳児だからこそ、日本語で話かける必要があるのです。子どもの脳の発達にはそのような関わりが必要なのです。そういう子どもの最善の利益を保障するという観点が抜け落ちている。このようなことを政府の会議で申し上げました。いろいろ、激論があったのですが、親の責任ということをおそらく言うのはいけないという意見も非常に強かったのです。育児は社会が担うのであって、親の責任ということを使うから、ストレスが溜まって、虐待が起きているのだとい

う意見もありました。

しかし、「親学」で一番大事なことは、親が変わるということなのです。子どもが変わるということではなく、まず、親が変わること、子どもをどうするかということではなくて、親自身がどのように成長するか、親が育つということです。これを、主体変容というのですが、英語ではtransformation、主体変容と言います。まず、親が変わること、教育する主体者が変わることに、看護師が変わること、患者をどうするかということの前に、看護師がどう変わるかということが大切なことです。これが、主体変容という考え方なのです。親業は子どもにどう関わるかという、How toの方法論が中心です。「親学」はもちろん方法論を含んでいるのですが、親自身がどう変わるかということが、大事なことです。自分自身の人間的成長が大事だという発想なのです。

この親守り歌にもどりますと、私が親守り歌を作ろうというのは、親守り歌は亡くなってゆくお年寄りに子どもが親を守りますよ、という歌なのです。親守り歌というのを言ったところ、松山市の青年会議所の青年たちが面白いと言って、親守り歌のコンサートをしたのです。1,000人以上集まりました。ここ以上大きな会場でした。そして、松山市で自由に募集したのですが、この親守り歌に応募してきたのは、松山の街で歌っている若者たちでした。街で歌っている若者たちというのは、一旦親に反抗して、親から離れた。ところが、だんだん親との絆を取り戻して、味わい深い作詞をしてくれました。素晴らしい作詞と作曲をしてくれました。それを選んで、親守り歌コンサートをしたのです。今も続いていて、4年目に入っています。今年、横浜で1万人ぐらいの全国の大会がありました。私と櫻井よし子さんが講演をさせてもらったのですが、そのあと、香川県の高松の人が親守り歌を持ってきたのですね。

この、親守り歌というのは、歌ではなく、詩なのです。多くの小学生、中学生が親について書いた作文を応募して、優勝賞に選ばれたのはこのようなものです。県で選考委員会を作りまして、最優秀作品は「僕の夢両親つれて雪見風呂」あとは優秀作品ですね。「父の日に心を込めた肩たたき」「冬だけど家族はいつも温かい」「反抗期過ぎてから知る親心」「離れても家族の絆は永遠だ」家族の絆という言葉が入っているのです。ほとんどの作品に出ているのは、心の温かさとか心のぬくも

りを感じたい、実は、この心のぬくもりに家族の絆、そこに幸せというのがある。

■ 人間力を育てる

ここにミシガン大学が調査をした世界の価値観調査というものがあるのですが、「自分が幸せだと思いますか」という調査なのです。ミシガン大学が世界70カ国以上に調査をして、「現在自分が幸せだと思うか」という質問を試してみた。「幸せだと思う」という人が最も多かった国はどこだと思いますか、ちょっと考えてみてください。アジア、アフリカ、北米、南米いろいろな国がありますが、6つだけいいですから、この中で、どこが一番幸せだと思いますか、スウェーデン、ニュージーランド、ナイジェリア、アルゼンチン、メキシコ、日本。「まず、スウェーデンだと思う方どうぞ。直観的に考えてください」。「ニュージーランドだと思う人」。「ナイジェリア」「アルゼンチン」「メキシコ」「日本」。日本、淋しいですね。5人もいないですね。

一番幸せなのは、ナイジェリアなのです。前の方の手が上がりましたね。今日の前の方の方、なかなか鋭い。二番目はメキシコです。これは、ほとんど手が上がりませんでしたね。なぜメキシコやナイジェリアの国民が幸せだと感じているか。News Weekがコメントでこう言っているのです。「天災とか、政治不安などの逆境が人間関係を深める。」ナイジェリアやメキシコなどの天災や政治不安とかの逆境が人間関係を深めている。幸せに最も影響を与えているのは人間関係の深さなのです。人間関係の中でその温かさだとか、ぬくもりを感じている人が幸せを感じているのです。別の調査では、個人の収入と幸福の相関関係は極めて低いと、金持ちだから、幸せとは限らないことが明らかになっています。

最近、私は埼玉の小学校で全校生徒と後に親と横に先生がいるところで講演をしました。いじめ問題が起きている時です。「偉い人と立派な人とどこが違うか」と聞きましたら、4年生がさっと手をあげました。「偉い人の中にはお金持ちの人がいますが、心が汚い人がいます」と言ったのですね。「幸せな、立派な人の中には貧しい人がいますが、心が美しい人がいます」。私はびっくりして、思わず目を見ました。本当に4年生かと。なかなか鋭い答えをしてくれました。この幸せと

いうものと何が一番関係しているかと言えば、人間関係です。

私は今日こちらに来る時に呉大学の教育方針とか、大学紹介をざっと見させてもらいました。その中で一番心に留まったのは「人間力」という言葉が大きな教育方針の核になっている。この「人間力」というのは、21世紀の教育のキーワードです。

私が、35歳で政府の臨時教育審議会の専門委員をした時に、京都の国際会議場で教育サミットというのがありました。ここには、44カ国の文部事務次官クラスが結集しました。経済の仕組みが違う、政治の仕組みも違ういろいろな国の人が世界から集まってどのような結論になったかと申しますと、結論から言って、世界の子どもの共通の問題点はアイデンティティクライシス、アイデンティティの危機ということです。それを失えば、自分が自分でなくなってしまうもの、それを教えていない。そこで、教育サミットの結論はニューベーシック、新しい基礎基本。これは、どういうことかと言いますと、人間教育の基礎基本を教えるということが抜けていたのではないかと。今までは、教科の基礎基本というのは、よく言われたが、人間教育の基礎基本、人間力を育てるという観点で抜けていたのではないかと。これが教育サミットの結論だったのです。

私は35歳の時、政府を代表してアメリカ、イギリス、オランダ、フランスを周りました。当時、各国の政府の要人と議論をしました。臨教審の方たちは、私が35歳の時、50歳を越していました。しかし、アメリカ、イギリスなどの人と議論をすると皆私と同じ世代でした。臨教審は平均すると60歳ぐらいです。しかし、各国の若い人々と議論しまして、まず、印象に残っているのは、例えば、OECDの人たちは学力についてどう考えているのかと思ったのですが、こう考えていました。「人生を切り開き、社会参加する力量」というのが学力の定義なのです。「人生を切り開き、社会参加する力量」これはまさに、人間力のことです。

私は今「師範塾」というのをつくっております。福岡、大阪、東京、埼玉で教師のリーダーを養成しています。もともと、松下幸之助さんが創った「松下政経塾」というのをご存知ですか、政治家養成の塾ですね。30何人が国会議員になっています。私はその入塾審査委員をさせていただきます

した。松下幸之助さんが生きておられる時は幸之助さんがご自分で面接をされました。その面接は言葉を交わさないで、運があるか、愛嬌があるかというのをみたのです。すごい面接です。

私は今日2時間講演をさせていただきますから、この人は愛嬌がいいなというのが、多少分ってきます。この人は全然笑わないなというのはわかりますが、運については分かりません。松下幸之助さんがなぜ運が分かったのか長い間疑問でした。でも、10年以上たって、だんだん分かってきました。ああ、幸之助さんは何を見たのか。ノンバーバルコミュニケーションという言葉がありますが、それは言葉ではないコミュニケーション、立ち居振る舞いとか、雰囲気とか、目ですね。目の力、眼力です。自信のない人はやはり目が座りませんし、「どうぞ座ってください」「もういいですよ」というような指示はないのですから、おたおたします。それが、すぐ現れるわけです。その立ち居振る舞いを見ていて、運というのがあるかどうか見抜いて、声がかかると合格なのです、声がかかると不合格なのですね。こんな怖い面接はありませんね。

幸之助さんが亡くなられた後、私とユネスコの事務局長と毎日新聞の編集委員に「志」を審査してくれという依頼が来たのです。「志」審査、全国の新聞に広告が出ました。「志のみ持参のこと」。いい広告ですね。政経塾に「何を基準に志を審査するのか」と聞いたところ、「それは先生が考えてくれ」と言われました。松下政経塾は研修に行くのは、ローヤル、今、イエローハットと言いますが、ここにまず行きます。ここで、何をやるかと言えば、トイレ掃除をする。イエローハットの鍵山さんの、あの研修が最初の研修なのです。私も一緒に行きました。そこには、「凡事徹底」と書いてありました。平凡なことを徹底してできないと大きなことはできない。幸之助さんは塾生たちに何を言うかということ、「おまえら、便所掃除をしているか」。これが、幸之助さんが一番はじめにかける言葉です。「トイレ掃除もできないで、天下国家、政治、地球環境、そのような大きなことを言うな」という考えであります。

今、「忙しい、忙しい」と言う人が多いのですが、それは、「雑な心でやっているから雑用という言葉になるのだ」という言葉も聞きました。松下政経塾の塾生を見ると、確かに運があります。たまたま偶然幸運に恵まれたというのではなく

て、運を引き寄せる生き方をしている、運を引き寄せる人間力を持っているのです。

■ 人間力とは

人間力は内閣府の人間力戦略研究会の定義によれば、3つあります。人間力とはなんだ。研究会の定義によれば、「知的能力」、いわゆる、IQです。2番目は「対人関係能力」、3番目は「自己制御能力」です。対人関係能力と自己制御能力は非常に大事な要素になります。

今、この国には、ニートと呼ばれる、自立できない若者が何十万といます。これは、対人関係能力と自己制御能力が育っていないのです。じゃ、どうすれば対人関係能力や自己制御能力が育つか、これからの教育の課題であります。私はなぜ「師範塾」をつくったかと言えば、先生たちの研修にはスキルの研修はいっぱいあるのです。すぐ授業に役立つスキルを学ぶ研修はいっぱいあるのです。しかし、スキルを学んでも、自分は変わらない。人間力で一番問われるのは、「夢」、「情熱」、「志」だと思っているのです。自分が夢を持っているか、志を持っているか、が大切なのです。

「夢を持て」と言っても、「あんたはどうなの」と言われたらおしまいです。今、日本の親たちが、教師たちが、夢を持っていない。日、米、中の高校生の調査がありまして、アメリカの高校生のなりたい職業は弁護士と医者が圧倒的に多いのです。中国の高校生の一番就きたい職業は、経営者、管理者、社長です。日本の高校生のなりたい職業は公務員、従業員なのです。従業員が悪いと言っているわけではないのです。チャレンジ精神がない。なぜそういう状況になっているかと言えば、これも、比較調査ですが、自分はだめな人間だ、自己肯定感のない子が非常に多いのです。自己肯定感、自尊感情がなければ、夢は湧いて来ません。

私が「師範塾」を創って2年目に入ってきた塾生に原田隆史という先生がいます。皆さんご存知かもしれませんが、本屋さんに行けば、原田隆史の本は山積みですから、読んでください。今カリスマ教師と言われています。彼は、大阪から私の「師範塾」に入って来たのですが、大阪の教育委員会に「一番しんどい学校に入れてくれ」と言ったのです。西成地区という、一番ひどい地区に入りました。そこは、生徒の3分の1が遅刻して来る学校です。そこに入って、遅刻者をゼロにし

した。一人で。どうやって遅刻者をゼロにしたかというと、まず、校門の前に立って、注意をします。これは心施と言います。心を施すと書きます。心を込めて、心を尽くして、心を伝える。これを心施と言いますが、これに徹したのです。それでもまだ遅れて来る。その場合は、家まで迎えにきました。まだ、遅れて来る。家に泊まって注意をしました。これで、親が動き始めました。厳しい体育の先生なので、「この先生が家に泊まったら大変だ、早く、学校に行きなさい」と。荒れている地域だから、まだ、遅れてくる。そういう子は自分の家に泊めて注意をしました。こういうのを屋施と言います。これで、遅刻者はゼロになりました。彼が出現したことによって、もう、自分の学校の遅刻者をゼロにした教師が千人を超えたのです。私は一刻も早くこのような教師を教育界に送り出したい。そのような思いで、「師範塾」を始めました。

今年はじめて、広島から、山広という校長先生に来てもらいました。この人は240人定員のうち、200人以上が退学しているという学校の校長先生をしていました。こんな学校ありません。埼玉にもありません。多分東京にもないでしょう。240人のうち、200人も退学するというのは、学校ではないですよ。生徒は出前でいろいろなものを頼むというのです。そして、食べ散らかしている。これを先生が跨いで歩いているというのです。そんな学校をどんなにして建て直させたか。いろいろ面白いことがありましたが、まず、はじめにやったことは、心施。遅刻してくる生徒にいろいろな言葉をかけていくのです。ここから出発したのです。次に、ゼロ・トレランス方式というのを採用したというのです。トレランスは寛容、ゼロ・トレランスは寛容さなし。校則に反した服装をしてきた生徒は一日の学校を欠席したと見なすと通告したのです。すると、一気に秩序が回復しました。しかし、それには、理由があったのです。この校長は厳しいだけではなく、とても温かい、肝っ玉かあさんだったのです。私は一緒に校内を回りましたが、授業中にも関わらず、多くの子が「先生」と言って手を振るのです。卒業式の時、ツッパリで荒れていた子どもたちがどんどん校長室に来て、抱きついて、「先生はお母さんよりお母さんだった」と言って泣き崩れた。それだけ、温かい校長先生だったのです。その温かい校長が毅然と秩序を示した訳です。そうしたら、チョウチョが

とまりそうな頭の子がすぐに、普通の髪に改めて来て、「先生、合格？ 合格？」と言って、実にあっけらかんとしていたというのです。

もっと驚いたのは、今度は親に対して働きかけたのです。往々にして、荒れている学校というのは、親が無関心です。私もある事件で大問題になった学校に講演に行ったことがあります。校長先生が挨拶するの、ほとんど聞いていませんでした。しかし、挨拶しても、「起立！ 礼！」と言っても聞いていません。真正面など誰も見ていません。これはだめだと思って僕は下に降りていきました。そして、見たら、いろんな子がいました。チョウチョウがとまりそうな頭の子もいましたし、まゆ毛のない子もいましたし、スキンヘッドの子もいました。

私はそのような若者を見るとだんだんと教育者魂が出てきて、今日はこの3人に話をしよう、心の琴線に触れる話をしようと、話しました。きれいごとや建前論はこの子たちには通用しない。あとで、皆さんにも紹介しますが、この子たちが一番感じ入ったのは、障害児の川柳とか、弱さに触れるものにとっても心を動かしました。例えば、どのようなものかと言いますと、障害児の川柳を紹介したのですが、このような川柳です。「ろうそくは光分け合い身を削る」このような川柳は、現代っ子は作れません。ろうそくは光を分け合って、自分の身を削っている。これが感性なのです。今、現代っ子に何が欠けているかというと、頭では分かるけれども、魂で感じる、心で切実に実感する感性、これを育てることが非常に難しいのです。

長崎県の佐世保市で小学校6年生の女の子が同級生を殺害しました。あの子の作文を読むと、「命はかけがえのない大切なものである」と書いています。頭では分かっていたのです。でも、命を奪ったという重大性を実感できない。遺族の悲しみに共感できないのです。私は「師範塾」で先生たちにどういう子どもが問題ですか、と聞いたところ、一番多かったのは、IQは高いけれども、EQが低い、EQとは心の知能指数ですね。情動です。最近では、HQ、これも今日のキーワードなのですが、IQに代わって、HQすなわち、人間力を育てる時の人間性知性、これは、humanity quotientといいますが、人間性知性というものをどう高めていくか、今の子どもたちは、IQは高いけれどもEQやHQが低い、これが問題です。

私は教師の研修に行く時は必ず、先生たちの

EQ、HQをチェックするところから始めます。「子どもたちの人間関係を深めろ」と言ったところで、教師自身が人間関係が深まらなければ教師自身の自己制御能力があるかどうか。教師自身の人間力が問われるわけです。今日は、看護の学生さんが多いと思いますが、看護の場所に働いていて、自分自身の人間力が問われるわけです。それを自らが振り返り、脚下照顧して、自分自身をどう育てていくか、これが大事な課題です。患者にどう関わるかの前に自分をどう高めていくかということが大事なわけです。そのために、人間性知性というのが大きなポイントのひとつですが、先ほど申し上げた、佐世保の少女がなぜ、命の共感性というものが育たなかったのか。これは、長崎家裁佐世保支部が処分決定要旨の中で触れていることですが、この子は小さい頃、親に甘えなかった、依存しなかった、一人で遊んでいた、親にとってはいい子であった。しかし、手がかからないから、愛着がなかった。愛着というものを通して、親との一体感の中で共感性や思いやりというのが育っていくものです。対人関係能力の基盤となるものは、愛着という、温かさやぬくもりで、愛情と信頼を受けたという、この一体感が、共感性や思いやりを育てていくのです。だから、私は今、親教育が大事だと思っているのです。それに関連する話をしましょう。

■「親学」の発想

これは、「親学」をスタートさせた背景にもなるのですが、学級崩壊という問題に、私が立ち会ったのは10年ぐらい前です。それまで、家庭教育とか、幼児教育とかに関心がなかったのです。私が実際やってきたのは、いじめとか、学級崩壊とか、登校拒否とかそういう小中高校生の問題に全国を飛び回っていました。ところが、10年前ぐらいから、学級崩壊という問題にぶつかったのです。学級崩壊という、小学校の授業が私語や立ち歩きで、授業が成立しないという状況が起きてきたのです。最初にこの言葉を聞いたのは東大阪市の小学校ですね。学級崩壊という言葉聞いたのは10年前ぐらいでしょう。それまで、学級崩壊という言葉は存在しなかった。あるいは、ジベタリアンという存在も、10年前には日本にはいませんでした。もちろんちょっとはいたかもしれませんが、電車やコンビニの前にベタッと座わり込んでい

る。あるいは、先生の研修に行くとき必ずこのような質問がでるのです。この間も高校の先生が、こういう質問をしました。「うちの高校に入ってくる女子生徒の半分以上は胡座をかいて座っています。体育館で下着が見えても恥ずかしいという気持ちがありません。どのように注意したらよいでしょうか」と私に質問をしました。

私は切れましたね。なんで、私に聞くのですか。あなたが恥ずかしいと思うのであれば、自分の言葉で語ってほしい。心を込めて、心を尽くして、心を伝えていかなければ伝わらないのです。なんかきれいごとでお説教のようなことを言われても、「変なオヤジ」ということになってしまうのです。しかし、もともと、「高校生になってパンツが見えて恥ずかしいと思わないのか」と言っただけで、手遅れですね。教育とは、子育てというのは、文化の抑止力を育むことなのです。

今、この国の子どもたちの問題行動がなぜこんなに増加してきたかと言えば、問題行動を促進する力が問題行動を抑止する力を上回り、抑止する力が低下しているからなのです。例えば、ルース・ベネディクトが『菊と刀』の中で西洋は罪の文化、日本は恥の文化だと言いました。この恥の文化がどんどん崩壊しています。「ベネッセ教育研究所」が行った高校生の調査がありまして、「恥の文化喪失調査」というのです。例えば、電車の中で化粧するのを恥ずかしくないと答えた高校生、教室の中でベタッと座り込んでしまうことを恥ずかしいと思わない高校生が非常に増えているのです。「私もそうだわ」という人もいるかもしれませんが、プライベートなところでお化粧するというのと、皆の目に見える、公衆の面前で化粧することは、当然区別しなければならない。公衆の面前で化粧をしているのが恥ずかしくないとこの数が増えてきました。忙しいので、「先生、そういっても」という人がいるかもしれません。

あるいは、先日、このようなこともありました。私は、よくPTAの全国大会で講演をすることがあるのですが、あるPTAの会合で校長がこういう話をしたのです。「雑巾ぐらゐはスーパーで買わないで、自分で縫って渡してほしい」と。こう言ったら、若いお母さんがバツと手を上げて、「先生、それは、古い、封建的な考え方です」と言ったのです。「雑巾はスーパーで買おうが、私が縫おうが雑巾は雑巾じゃないですか」と言うのを聞いて、他のお母さんが皆拍手をしたというので

す。私は、よくこの話をするのですが、先日は終わってから、一人のおかあさんが来て、「先生、親学と言っているけど、無理、無理」というのです。「どうして？」と聞いたら「100円ショップに行ったことありますか？ 100円ショップに行ったら、雑巾3枚100円で買えるのよ、3枚100円で買える便利さと、自分が縫うという困難さとどっちを選択すると言われたら、100人いたら、100人が、やっぱり便利さを選択するでしょう。だから、先生は手作りの教育と言っているが、無理、無理」と言って帰って行ったのです。

今、私が着ているこの背広もネクタイも皆、手織り物です。家内の父親が作ったものです。教育も看護も1対1のぬくもりのプロセス、これは、効率化できない、合理化できない、その1対1のぬくもり、温かさが大事なのです。育むという言葉はどういう意味かと言いますと、「羽含む」、すなわち、親鳥が羽で子どもを包むこと、抱きしめること、これが、育むということ。心が育つということは、その愛情と信頼を丸ごと子どもは受け止める、患者をまるごと受容する、これが、育むということです。その愛着というものがあって初めて育つということがあるわけです。だから、親が親心を失ってしまえば、子どもは優しさを学ぶチャンスを失ってしまうのです。

今、親心がどんどん崩壊しています。私は4月に政府の教育再生会議に呼ばれて、「親学」の話をして参りました。その時は、脳科学の専門家と一緒に、脳科学と親学と一緒に、セットで議論されたのですが、冒頭に私はこう申し上げたのです。これは、皆さんにも是非読んでいただきたい本があるのですが、渡辺京二という人が書いた『逝きし世の面影』という本です。これは、平凡社ライブラリーから出ていまして、第10章は「子どもの楽園」という題なのです。ここだけでも読んでください。第10章「子どもの楽園」、ここだけでも読む価値があります。それは、江戸時代の子ども様子を外国の人がどう見たかということが、書いてあります。例えば、エドワード・シルベスター・モースが、『日本、その日、その日』という本の中でこのように紹介しています。「世界中で両親を敬愛し、老年者を尊敬すること日本の子どもにしかくものはない」世界中で最も日本の子どもは親を愛して、お年寄りを尊敬しているというのです。

さらに「日本の子どもほど、行儀よく、親切な

子どもはいない」とあります。今、最も躰を買っているのは、日本の子どもですよ。マナーができていない。もっと、躰を買っているのは、それを注意しない日本の親です。「日本人の母親ほど、辛抱強く、愛情に富み、子どもに尽くす母親はいない」。日本のお母さんが一番愛情深いというのです。今、どうでしょうか。『日本人の価値観世界ランキング』という本が出ていますが、その中で、「親が子どもの犠牲になるのは、やむを得ない」と、これは、皆さんにも手を上げてもらいましょうか。親が子どもの犠牲になるのはやむをえないと思われる方、手を上げていただけますか。非常に少ないですね。まあ、いろいろな理由があるのだと思いますが、日本の平均は38.5%なのですね。そして、世界の平均は73%なのです。日本は73カ国中72番目なのです。今、皆さんの9割は手を上げなかったもので、これについてもコミュニケーションを取りたいところなのですが、犠牲になるということに対して、少し議論が必要なのかも知れません。

日本の若いお母さんにアンケートを取りますと、「子育てはイライラする」というのが、4分の3を超えているのです。「なぜ、イライラしますか」と聞きましたら、「自由な時間を奪われる。子育ては自由な時間を奪われて、自己実現の時間を妨げられ、犠牲になることだ」と多くの親が考えるようになりました。男女雇用機会均等法の成立が大きな影響を与えておりますが、「家で子どもを育てるのは損だ」「保育所に子どもを預けて働いた方が得だ」と、損得勘定が子育てに入ってきましたね。そして、経済の物差しが幸福の物差しを押し切ってしまった。事例を申し上げます。熊本の保育園協会で、講演をした時にこんな話を聞きました。熊本県では、手弁当持参の日が月1回あったのです。これが、行政の指導でなくなったのです。「なぜなくなったか」と聞きますと、給食費を払っているのに、「弁当を作れ」と言うのと、「金を返せ」と言う親が増えてきたからだということです。なぜ、手弁当持参の日を作ったかと言えば、どんなお弁当を作ってくれたかなという、ぬくもりや温かさを感じる中に幸せがあるからです。ところが、「給食費を払っているのだから」という経済の物差しが幸福の物差しを押し切ってしまった。これが、今この国で起きていることです。

安倍前総理が「美しい国日本」とか、「美しい日本の心」とか、そのようなことをおっしゃいま

した。家族の絆を再生しようとおっしゃった。でも、政治と金、年金という、経済の物差しでひっくり返ってしまった。これが、現実はこの国で起きていることなのです。

■ 困難を共感する心

何が教育に問われているかに話を戻しますと、障害児の川柳にもどりますが、「雨降って皆の心汚しちゃう」「時計さん長針短針別れちゃう」。皆さん、時計を見て、涙を流す人はいませんね。長い針と短い針がやっと会えたと思ったらすぐ離れますね。この子たちは親から別れて施設に入っている子どもたちなのです。親との別れの悲しみで時計をみるので、やっと会えたと思ったら、すぐ別れなければならない悲しみがあるのです。これが、胸をかきむしられるほどの悲しさなのですね。感性というものは、一体感から生まれてくるものです。家族との一体感、人間関係の一体感から生まれてくるものです。これが幸せの物差しなのです。その一体感が多くの子どもたちに失われている。

「最も幸せの国」で一番手が上がったのはスウェーデンです。スウェーデンはなぜ幸せかと思ったかという多分、福祉制度が充実しているからだというのが理由でしょう。ここに『福祉国家との闘い』という本があります。100歳を越えているおじいちゃんに、「おじいちゃんの人生で一番印象に残っているのはなんですか」と聞いたところ、「家族が崩壊してしまったことでした」と言いました。幸福の物差しは人間関係だと言いました。その一番大事なことは、親と子の絆です。そのぬくもりや温かさを感じるところに幸せがあるのです。

マザー・テレサが日本に来た時にこう言いました。「アジア、アフリカのストリートチルドレンよりも、日本の子どもの方が不幸かもしれない」「アフリカの国々が減びるとしたら貧困が原因だろうが、日本は心が原因で減びるでしょう」、「日本人はインドの事よりも日本の国内の心の貧しい人々への配慮を優先して考えるべきです。愛はまず手近なところから始まります」、「人間にとって最も大切なのは、人間としての尊厳をもつことです。パンがなくて飢えるより、心や愛の飢えの方が重要です。豊かな日本に心の貧しい人が沢山いる。それに気づくことさえできない人もいます」、「愛

は家庭から始まります。先ず家庭の中から不幸な人を救いなさい。夫婦が愛し合い、母親が家庭の中心となりなさい。平和と潤いの家庭が築けたら隣人を愛しなさい。自分の家庭が愛に満たされなければ隣人を愛することはできません」と。

これは、私たちには、モノの豊かさはあるかもしれませんが、心の豊かさ、ぬくもり、温かさ、人間関係の温かさが欠けているという事だろうと思うのです。しかし、障害のある子にはそれがある子が多いですね。この「時計さん長針短針別れちゃう」という句に対して、荒れている学校の子どもが四百字一枚感想文を書きました。その学校では、一番多かったのは教師不信です。指導拒否というのが圧倒的に多い学校で、教師とも親とも人間関係が結べない。不信感を持っている。ところが、この「長針短針別れちゃう」という繊細な感性の作品に感想を紙一枚に書くような、やさしい心を持った生徒がたくさんいるわけです。「流れ星親を探して一人旅」「浮き袋みんなの泳ぎ助けてる」「餅さんはいつも叩かれ痛そうだ」「コップさん水が入って寒そうだ」「かかしさん夜中も起きて眠たそう」「連絡船みんなと別れて悲しそう」「空見たら雲がおいでと言ってきた」「風さんはきれいな歌を歌ってる」「北風は寂しがりやの風なんだ」「菊の花心をきれいにしてくれる」「かたつむりやさしい心を持っている」「雨さんがしずかにささやく春来るよ」「渡り鳥いつまで旅をするのだろう」「スイカ割り割られるスイカいたそうだ」、こんな子いないでしょう。スイカを割る時に割られるスイカ痛そうだと思っている子どもはいないと思います。

私はこの作品にふれた時、弱さへの共感性ということを考えました。今までの教育は「強くなれ」という教育をしてきました。しかし、弱さというものに共感する心というものはとても大事で、人間力というものの中には、そのようなものが含まれると私は思います。乳幼児、あるいは、亡くなっていくお年寄りにどう関わるか、ケアリングといいますが、弱者をケアすることによって、ケアされる。これは互惠関係なのです。一方的に与える関係ではなく、介護もそうです。看護もそうだと思いますが、看護をすることによって、ケアすることによってケアされる、これが大事な互惠関係、これをどのように体験するかが大切なのです。

最近の子どものキーワードは「関係ない」「それがどうしたの」。昔はね、「親が悲しむよ」と言っ

たら、反省した。でも、今の子どもはそうではないですね。そのようなことをしたら、「親が悲しむよ」と言ったら、何と言うと思います。「関係ない、それがどうしたの」皆さんどうします。我が子がそう言ったら。「関係ない、それがどうしたの」。これが、現代っ子のキーワードなのです。これに、大人たちが立ち往生している。どうしたらよいかというと、関係性を体験させたら良いのです。関係を体験させれば変わります。残念ながら、最近の子どもたちは実際の直接体験や自然体験が、非常に希薄になっているのです。

平成16年の1都9県の体験活動の調査があります。その結果を見ますと、体験の現実には悲しい現実ですね。生まれたばかりの赤ちゃんを見た事がない、50%を超えていますからね。私の少年時代は家で生まれ、家で死んでいますから、私は母も父も祖父も祖母も臨終に立ち会いました。母は意識がなくなりまして、パイプで命を維持していたのですが、医師が家族に向かって、「パイプを外してよいですか」と聞きました。その時、私たちはいくらコミュニケーションができなくても、「パイプを外していいです」とは、家族としてはいえませんでした。病んでいるとき、死んで行く時、どう関わるかということは、とても深い、まさに人間力に関わる、弱さということに関わる時です。強い時には立派です。でもどんなに強くても、病んだり、老いたり、誰もが弱さを体験します。誰もが失敗します。誰もが挫折をします。失敗や挫折をどう受け止めて、どう関わるか。

「昨年はこの公開講座のテーマは何ですか」と聞きましたら、ターミナルケアだということでした。私は、キューブラー・ロスの本を読むのが好きで、「死ぬ瞬間」というシリーズの本を書いていて、ターミナルケアのセミナーに30歳代の若者でしたかね、ニコニコしながらそのターミナルケアのセミナーを受けていた、という文章を読んだことがあります。「あなたは余命幾ばくもないのに、なぜそんなにニコニコして聞いているのか」と聞くと、こんなことを言った「自分はエイズの末期でカボシ肉腫ができていて、誰が見ても、もうエイズの末期症状です。肉体状況も末期に来て、走馬灯のように思い出した瞬間は、無条件で愛してくれた瞬間であった。それは、多くはお父さん、お母さんとの触れ合いであった」というのですね。

私は3歳の時に40度以上の熱をだしました。父親が肩車をして、夜中に医者をつたき起こして、

連れて行ってくれました。その時のぬくもりはこの年になっても忘れません。父親にしっかりと肩車されて、自分は肉体的にどうにもならない状態で、空を見て、「きれいな川やな」と言ったとよく父が言っていました。一番弱い時、人間というのはぬくもりを一番深く感じる時ですね。盲腸になって、小学校の時入院しましたが、なかなか見舞いに来てくれなくて、淋しくて、淋しくて、どうにもならない時に、母親が見舞いに来て、母親が部屋に入った瞬間を、今でもよく覚えています。

このような無条件の愛情を受けた瞬間を、走馬灯のように思い出したというのです。だから、死ぬ前に親に「ありがとう」と言って死にたいと思って、親に電話をしたのです。親には黙って、嘘をついていたものですから、エイズだということは知らないのです。

いよいよ最後に面会することになって、もし、親が自分のカボシ肉腫を見て、抱きしめるのをためらったらどうしようと不安になったのです。昔はまだ、偏見があったので、身体の接触で感染するかもしれないという不安がありました。親が感染を恐れて、ためらったら、もっとその方がショックだというのです。でも、会うと、親の方から駆け寄って来て、抱きしめてくれた。「おまえがエイズだということは分かっているよ。心配することはないよ」と言ってくれた。だから、自分はエイズに感染することで、親の絶対的な愛に目覚めたのだと。だから、「もう死んでもいい」「死ぬことは怖くはない」ということです。ぬくもり、温かさということの中に幸せがあって、それを実感したら、死ぬということも恐怖ではなくなる。

私はアメリカに3年留学していたのですが、ホワイトハウスの近くで80歳代のおばあちゃんと看病をしている一人娘の家がありました。とても印象的なのですが、その80歳代のおばあちゃんは寝たきり老人です。そして、60歳代の娘は母親の看病で一生が終わりかねない。おばあちゃんは「あなたのおかげで生きていけるのだ」と、本当にいつもニコニコ顔で感謝感謝の毎日でした。娘も犠牲になっているという感じはまったくなくて、「おばあちゃんのお世話をすること、私の生き甲斐なのよ」という会話を聞いていたら、考えさせられました。つまり、犠牲になるという考え方の問題点でした。確かに、寝たきり老人、自分の親の寝たきり状態を看護するということは、考えようによっては、犠牲になるということです。

子育てでも自分が犠牲になるということだと考える母親が増えています。

メイヤロフの『ケアの本質』という本を読んだ時にこのようなことが書いてありました。私はかって自由って何だろうということを考えた時に、英々辞典で自由という言葉調べた時に、freedomとかlibertyとかあるいはnirvana、これは涅槃という意味なのですが、お釈迦さんが亡くなる時に、涅槃図がありますね、心と身体が解放される。もう一つはsalvationという英語があって、溺れている人を潜って行って、救い出すと書いてあったのです。自由にそんな意味があったのか、私たちが戦後習って来た自由の意味とは全く違ったものだと思います。自由というのは、弱者を救い出す。弱者とは誰だ。それは、乳幼児であり、病人であり、老人です。そのような方たちのお世話をすることによって、実は自由になれるという発想が欠けていたのではないかと思ったのです。子育てにも、看護にも介護にもそのような考え方が共通するのではないかと思います。

■ 体験の中で気づくこと

さて、川柳にもどります。障害児の川柳がまだ続きます。「鐘の音がそらの雪と待ち合わせ」「ゴキブリはみんなに嫌われかわいそう」。僕の中にはまったくありません。マンションに住んでいる人間にとっては敵です。この間も女房が一匹発見したというので、大騒ぎでした。あちこちにゴキブリホイホイを置いて、ゴキブリは本当に敵ですが、私は女房と銀座三越の喫茶店でコーヒを飲んでいたのですが、歯触りがしたので、ベツとはき出したら、ゴキブリだったのです。まるまる一匹だったのです。これは、色がコーヒととけ込んでいますし、まさか、銀座の三越でコーヒにゴキブリが入っているとは思いませんでした。それを吐き出したら、店の方が大変慌てまして、一番上等のケーキとお替わりのコーヒを持って来て、「今日は、勘定は結構でございます」と言っていましたが、僕はその時にこの句を思い出すぐらい、五臓六腑にしみ込んでいるのです。私にはない心ですから。これは、重い障害を持っていて、親から離れて施設にいて、差別を受けている。だから、自分はそのような弱さを日々感じているから、ゴキブリに対して、皆に嫌われ悲しそうと思うんですね。

弱いということは、マイナスではないのです。弱さを自分が体感するから、やさしさや柔らかさやしなやかさの心につながるのです。弱さへの共感性を育てるということは、教育の大事な役割なのです。なぜいじめがこんなに起きているか、それは、共感できないからです。いじめられた側の悲しみを実感できないからです。だから、強くなれという教育だけではなく、弱さに関わるというのは大事なことです。

ある中学2年生の女の子に1週間の体験活動が義務づけられました。兵庫県のトライやるウィークが始まりまして、阪神淡路大震災の後、兵庫県で中学生が5日間の体験活動をしました。あれが、全国に広がったのです。小学生は集団宿泊体験、自然体験、農漁業体験を1週間やることになりました。中学生は就労体験、職場体験を1週間。

体験というものが、子どもを変えます。「流汗悟道」というキーワードがあるのですが、汗を流す体験を通じて、道を気づかせるということなんです。道を教え込むというのではなく、道に気づかせるということです。道は目に見えない価値です。これは北海道家庭学校というところの教育方針なのですが、体験を通して気づかせる。これがこれから一番大事な課題になってくると思うのです。

「ガングロ」という顔の真っ黒な女子中学生が、おばあちゃんの介護をしたいと申し出たのです。先生は顔が真っ黒だったので、校則に反しているから、元の顔に戻せと言ったのです。そうしたら、「関係ない」と言って「私の勝手」と言って、いくら言っても改めなかった。それで、おばあちゃんに会った瞬間におばあちゃんは何と言ったかという、「怖い、いつもの人呼んで」と言ったのです。そこで、中学生は一気に悟ったのです。関係ないと思っていたが、自分で望んでおばあちゃんの世話をしたいと思ったおばあちゃんに「怖い」と言われた。おばあちゃんにとって怖い自分では、おばあちゃんに関わることはできないのだ、ということに気づいたのです。おばあちゃんのお世話をするためには、おばあちゃんに怖くないと思われる自分にならなければいけない。それで初めて元の顔にしたのです。

関係性、つまりつながりというものを体験させれば、そこで、気づくのです。だから、お説教で教えるのではなく、関わり体験することが子どもを変えるのです。HQを育てるポイントは、人間

性を育てるポイントは、多様な人間関係を体験すること。ですから、看護の学生さんも多様な関係を体験するというのが、必要です。多様な関係には、相性の合わない人もいるでしょう。この人さえいなければもっと人生楽しいと思う人が、それが夫や妻では困りますけど、相性の合わない人というのは必ずいますよね。その相性の合わない人とどううまくやっていくかが、とても大事なことです。まさに、人間関係能力が問われるわけです。

まだ、続きがあります。「鬼が住む心を神に見透かされ」「りんごさん木から離れてさようなら」「秋になり虫さんたちとお別れだ」「目をつめば死んでしまうと泣いている」「心の目一人一人が磨いてく」「眠ってるはやく芽を出せ私の芽」「雨上がり虹を眺むるカタツムリ」「チューリップチョウチョさんとキスをする」「靴の先いつも歩いて疲れてる」「鯉のぼり家族揃って楽しそう」さらに、重度の脳性小児麻痺の少年の詩があります。

ごめんなさいね、お母さん
ごめんなさいね！ お母さん
僕が生まれて、ごめんなさい
僕を背負う、母さんの白いうなじに、僕は言う
僕さえ生まれなかったなら、母さんの白髪もなかったらね
大きくなったこの僕を、背負って歩く悲しさも
かたわな子だね、と振り返る、冷たい視線に泣く事も
僕さえ生まれなかったなら

今度はお母さんが、脳性小児麻痺の子どもにこのような詩を書いています。

私の息子よ、許してね
私の息子よ、許してね
この母さんを許しておくれ
お前が脳性麻痺と知った時
ああ、ごめんなさいと泣きました
いっぱい、いっぱい泣きました
いつまで経っても歩けない、お前を背負って歩く時
肩に食い込む重さより、歩きたかろうねと、母心

重くはないと聞いている、あなたの心が切なくて

そして、また、子どもがお母さんに詩を書きました。

ありがとう、お母さん
 ありがとう、お母さん
 お母さんがいる限り、僕は生きていくのです
 脳性麻痺を生きて行く、やさしさこそが大切で、悲しさこそが美しい
 そんな人の生き方を教えてくれたお母さん
 お母さん、あなたがそこにいる限り

皆さんどう感じられたでしょうか。「悲しさこそが美しい」。これはなかなかきれいごとで書ける文章ではありません。この脳性小児麻痺で生まれてきたことはあまりにも悲しい。悲劇です。でも、その悲しさの中で美しい温かさや美しいぬくもりをお母さんとの関わりで感じている。そこに、幸せがあるのではないかと思いました。そして、お母さんは、このように書きました。

私の息子よ、ありがとう。
 ありがとう、息子よ。
 あなたの姿を見守ってお母さんは生きてゆく
 悲しいまでの頑張り
 人を労る微笑みの、その笑顔で生きている
 脳性小児麻痺の我が息子
 そこにあなたがいる限り

これが、親子の絆だと思うのですね。そこに、幸せがある。まだ、小児麻痺の別の子がこのような詩を書いています。

母さん、ありがとう
 母さんが守ってくれた命
 ありがとう、母さん
 僕は今、たくさんの温かさを知りました
 何もできない僕だけど、なんとなく幸せ
 母さん、小児麻痺にしてくれて、ありがとう

次は、障害児を持ったお母さんの詩を一つだけ紹介します。「失わないで青空」という詩です。障害児を持ったお母さんの詩です。

なにげなく過ぎてしまうこと

当たり前過ぎてしまうこと
 どれも、途方もなく輝いて見えるのは、障害の子を持った幸せ

先ほどの小児麻痺の子は小児麻痺にしてくれてありがとうと言いました。このお母さんは障害の子を持った幸せと書かれました。

初めて私の顔を見て笑った日
 初めて言葉を話した日
 初めて水道の蛇口をひねった日
 初めて一人で電車で出かけた日
 みんな記念日
 その度に、ワッーと空に向かって叫びたくなる
 胸の中から、何かが湧き立ち大きく大きく見えて来る
 当たり前のことなのに、大きな声でみんなに伝えたくなる
 当たり前じゃないって、素晴らしいなあ

■ しっかり抱いて、下に降ろして歩かせろ

皆さんどのようにお感じになったのでしょうか。冒頭に日野原先生が一番大事なものを失った時に初めて気づく世界、磨かれる感性、というものがあるとおっしゃいましたが、私はこのような事なのかなと思いました。私の家内の父は61歳で、癌で亡くなりました。今、私は56歳ですから、もう、5年後かと思うと、何とも言えません。東京のマンションにやって来て、「別れに来た」と言いました。私はあわてて、本屋さんをかけずり回って、癌の本を30数冊買ってきました。そして、臨教審の会長をしておられた方は京都大学の医者で、後の神戸市民病院の院長にもなられた岡本道雄先生です。「岡本先生に相談すれば、日本一の名医を紹介してもらえるよ」と言いました。「世界一の薬を必ず取り寄せられるよ」といいました。しかし、その時、彼女の父は首を振ったのです。自分はここに、癌と闘うために来たのではないのだと。抗癌剤を打ち込んで癌細胞と闘う、つまり、治療を求めてきたのではないのだ、心安らかに、死んで行きたい。治療を求めてきたのではなく、ケアを求めて来たのだ。心のケア、私と家内と心の会話をしに来たのだ、と言うのです。

10日間、語り尽くしました。今までどのような

気持ちで生きてきたか。今、どのような気持ちでここにいるかを語り尽くしました。来た時はまだ元気でした。でも、みるみる腹水が溜まっていて、最後は動けなくなりました。そして、意識不明になりました。ハッと気づいた瞬間に意識不明になっていました。あわてて、東京のマンションから、タクシーで秩父市というところが郷里なのですが、そこにとばしました。そこで、父は秩父織物を作っていました。医者呼んで、45分経った時に、突然ニコッと笑ったのです。家内が笑ったと叫んだ瞬間に、医者をご臨終ですと言いました。

私はその瞬間をよく覚えておりますが、61歳で、癌で亡くなるというのは、不幸な死です。世の中には、心がけが悪いのに、もっと長生きしたり、大もうけしたり、大活躍している人がいっぱいいます。私は正直、ああ、この世の中には神も仏も存在しない。なんで、不公平なのだ、と心の中で思いました。しかし、ニコッと笑った瞬間は一生忘れません。臉を閉じれば、すぐ、臉にそれが浮かんできます。私は大げさな意味ではなく、死も栄光だ、とそう思わされました。こんなにすごい死に方ができるのかと。我々遺族に「悲しむなよ」と訴えている、そんな笑顔でした。

すごい死に方を見せてもらったと思いました。もうお亡くなりになりましたが、作家で草柳大蔵という方とテレビで何度も対談をやっていたのですが、その方がこんなことを言っていたのです。「高橋さん、それはね、死に甲斐というのです」今まで、生き甲斐ということは、考えた事がありますが、死に甲斐というのは考えたこともありませんでした。「死に甲斐って何ですか？」と聞いたら、「自分は『あなたの死に甲斐はなんですか』という本を書いているので、読みなさい」と本をくれました。

それを読んでいたら、飯田蛇笏という、俳句を詠む人のことが書いてありまして、この方は家族に先立たれたのです。子どもも妻も亡くなり、天涯孤独になったのです。天涯孤独になったのですが、どのような言葉を残しているかという、「誰彼もあらず一天自尊の秋」、だれが亡くなった、彼が亡くなったというのではなく、自分が今生かされていると思うありがたい心、これだけだということです。感謝の心です。アメリカでは子どもたちに必ず thank you という感謝の言葉、それから please、どうぞという思いやりの心、you are welcome、どういたしまして、という言葉。これ

を必ず教えるのですね。感謝の心です。これが、子育ての出発点なのです。

ところが、我が国では、『女性セブン』という雑誌に永六輔さんが紹介した「いただきます論争」というのがあります。この顔面で『女性セブン』を買うのはちょっと恥ずかしかったですね。『女性セブン』をくださいと言っただけでは聞こえなかったの、大きな声で『女性セブン』くださいと言ったので恥ずかしかったのですが。このようなことでした。「いただきます」「ごちそうさま」を学校で強制しないで欲しい、という手紙をTBS ラジオで読んだのですね。すると、全国から投書が殺到して、3割の方は「その通り」と言ったということです。給食費を払っているのだから、「いただきます」「ごちそうさま」を強制しないでほしい、という親が3割いるということですね。

今、ケニアのマータイ女史が全世界に地球環境の破壊から人類を守るためには「もったいない」という日本人の心が大切だと訴えています。ところが、今の日本人が「いただきます」「ごちそうさま」をけしからんと。日本の心はかたじけない、ありがたい、もったいないとか、おかげさま等の心ですよ。そのような心というものは、親が生活の中で、後ろ姿で示さないといけない。学校の道徳で教えるものではなく、生活の中で、後ろ姿で、これは感化するということですが、生活の中でしか育たないものです。

読売新聞が8月31日の一面トップで、「日本人のマナーが悪化した」と答えた人が88%という世論調査を発表しました。「日本人の公共マナーが悪くなっている」が88%です。なぜ日本人のマナーが悪くなったか、原因を調べたら、「家庭でのしつけに問題があるから」と答えたひとが76.8%とトップでした。次は「大人のマナーを守らなくなっているから」。次は「周りの大人が子どもに注意をしなくなっているから」。「なぜ、大人が注意をしないか？」と聞いたら、「反論されたり、暴力を振るわれたりするかもしれないから」が64.5%です。

つまり、全部大人の問題なのです。子どものマナーが悪くなっているのは、全部大人の問題です。私はいつもブーメランと言っているのです。飛ばせば返ってくるものです。大人が変われば、必ず、子どもがよくなるのです。だから、自治省で青少年の健全育成のプログラムを作る会の座長を頼まれた時、私は申し上げました。「これまで

の健全育成の考え方を考え直してください。健全育成という考え方に文化の抑止力としての視点が抜けています。子育ては文化なのです。」「日本人はしっかり抱いて、下に降ろして、歩かせろ」と言ってきました。

例えば、白虎隊で有名な会津藩の藩校に日新館というのがあって、10歳以下の子どもにはどのような事を教えてきたか、「什の掟」というのがあるのです。どういうことが書いてあるか。「年上の者の言うことに背いてはなりません」「年上の者にはおじきをしなければなりません」「卑怯な振る舞いをしてはなりません」「弱い者をいじめてはなりません」「ならぬものはならぬものです」。これを教えてきたのです。これを今、幼児教育、幼児教育、家庭教育で教えていないのです。「いじめの原因は何か？」と読売新聞がアンケート調査をしたら、1位は「家庭で、社会のルールを教えていない」。これがトップでした。64.5%。いじめが起きるとマスコミは、「学校が悪い」「教師が悪い」「教育委員会が悪い」と責め立てます。家庭のことは言わないのです。校長が謝るという光景はたくさんあります。しかし、親がどうしたのかという、そのことは問いません。

私がある新聞にイギリスとフランスとアメリカの事を書いたら、政府の教育再生会議からすぐ電話があって、「詳しい資料を送ってくれ」と言ってきました。日本人は残念なことに、外国と比較しないと、今日本がどんなにおかしいかということが分からないのです。例えば、イギリスで10年前に「子育て命令法」というのが作られています。Parenting orderといいます。子育てをしない人は1000ポンドの罰金をとる、滞納した人は禁固刑と法律で決めています。子どもが更生するまで最長で1年間、親の講習を義務づけています。子どもの問題は親の問題だという、発想が前提にあるのですね。あるいは、フランスでは理由なく月4回欠席しますと、9万円の罰金を親から取るという法律を決めました。そして、親が教育義務を放棄した場合、例えば、熊本で赤ちゃんポストが問題になりました。最初に連れて来たのは、福岡からお父さんが3歳の子どもを連れて来て、かくれんぼをしようと騙して、帰って行ったのです。この子の心にどんなに傷が残るか。親が教育義務を放棄した場合、フランスでは2年間の拘禁刑、360万円の罰金というものを決めています。アメリカでは「子どもを置きざりにしない法律」とい

うのがあって、5年前にできました。シアトル市やカリフォルニア州では不登校について、一日25ドルの罰金か親にボランティア活動を課しているのです。私が政府を代表して海外視察をした時にニューヨークの中学校に行きました。中学生が窓ガラスを割りました。すぐにスクールポリスが駆けつけて、親に連絡を取って、親から罰金をとりました。あまりにも印象的だったのです。

日本は校外で起きた事件の監督責任を学校や教師に求めます。アメリカは校内で起きた問題行動の責任を親に求める。教育の責任という意識が日本の場合は親にはあいまいののです。だから、保育士にわが子の「鼻水が出ていますよ」、中学生のわが子に「風呂に入るように言ってください」と学校に頼みにくるような親の責任を自覚しない親がこんなにできたのです。

実は、学級崩壊の根本にある問題は、学歴教育、幼児教育の崩壊なのです。保育士456人のアンケート調査がありまして、朝日新聞が大きく取り上げたのですが、「幼児に学級崩壊の芽」ということで、今から8年前の統計ですけれども、保育士がどのようなことを言っているかと言いますと、「子どもが変わった」というのです。どう変わったかという、「しらけて遊びに参加しない子が4歳児頃からいる」「疲れた、もう止めるとすぐ言う」「少し自分が拒否されるとショックを受け、泣きわめいたり、パニックになってしまう子が増えた」「こうか、こうかと確認しないと不安な子が増えた」「膝に甘えてくる子が多くなった」「うるせえー、ばか、おまえ、くそばあといった乱暴な言葉を使う子が多くなった」と言うのです。

ところが、「親が変わったことが、このように子どもが変わった原因だ」と言うのです。親がどのように変わったか、このように言っています。一番多いのは「受容とわがままの区別がつかない」。わがままを放置してはいけません。受容ということは、無条件で受け止めること、「親学」の基本の考え方は2つなのですが、それは、子どもの心や脳が発達するためには、母性的な関わりと父性的な関わりが大事だ、これが、親学の基礎理論なのです。母性原理というのは、日本人が言ってきた「しっかり抱いて」という愛着ですね。母性原理というのは包み込む、包摂、包容、保護というやさしさのかかわりなのですが。

今日皆さんにお配りしている資料があります。これは、『週刊ダイヤモンド』というのに、巻頭

インタビューで出ているものですが、その資料の左の上に、「しっかり抱いて、下に降ろして歩かせろ」というのがありますか。見出しのタイトルです。「しっかり抱いて、下に降ろして歩かせろ」これが、日本の子育ての知恵なのですね。三つ子の魂百まで。これがしっかり抱いて、これが受容です。まず、無条件の信頼と愛情で抱きしめる。これが、受容なのです。今、これが、危うくなっているのです。同級生を殺害した佐世保の小学校の女の子はお母さんから無条件の愛情と信頼で受け止められなかった。だから、共感性が育たなかった。だから、命を奪う重大性を実感できなかった。対人関係能力の基盤になるのは、愛着なのです。無条件の愛情と信頼で受容される。まず、受け止める。これが母性愛なのです。

今日のご質問の中にもこのようなものがありましたね。「どのように関わったらいいのか?」と。これは、介護もそうだし、親との関わりもそうなのですが、まず、心を受け止める。これが、受容なのですね。患者の心を受け止める、親の心を受け止める。まず、心を受け止める。受容、これが母性原理なのです。これはケアリングです。そして、しっかり抱いての次ぎは、下に降ろすでしょう。これは、愛着からの分離ということなのです。いつまでも抱いていたのでは自立ができないので、そこで、切る。父性原理は秩序、規律、鍛錬を重んじる切断の原理なのです。何を切るかというと、子どものわがままを切る、ということなのです。子どもの壁になるということが必要なのです。

■ 人間力は自分を信じる力

明星大学は近くに多摩動物公園があります。私は毎年、一回だけ、学生を連れて行って、動物の子育てについて、飼育係の人の話を聞くのです。「これは観光ですか? 勉強ですか?」と必ず聞かれます。「はい、勉強です」というと、入園料がタダになります。1時間半の間、1種類の動物だけに話をしぼって聞きます。今日はオランウータンとか、今日はゾウとかですね。たった1時間1種類の動物の子育てについて、ものすごく勉強になります。学生に1年間の感想を書いてもらうと、この授業が一番楽しかったといえます。

ある時、チンパンジーの話を聞きました。チンパンジーは我が子を6カ月抱いているというので

す。6カ月経ったら、下に降ろすというのです。これは分離ですね。それ以上甘えて来ても、全部はね飛ばす。人間のお母さんよりも、日本人のお母さんよりも、分離がしっかりしているのです。今、一人っ子が増えてきていて、母子分離不安が増えてきました。母親も子どもから離れられない。突き飛ばすのは、冷たい気持ちで突き飛ばすのではないのです。1人で生きて行けない、いつまでも抱いていたのでは独り立ちできないから、甘えて来る子をあえて突き飛ばす訳です。優しさに裏打ちされた、厳しさなのです。

父性原理というのは、切るという働きだと言いました。私はいつも、私の父の話をしますが、父は高校の教師でした。中学校の1年生の時、私を鶏龍山に連れて行きました。「赤とんぼ」を作った三木露風の家は私の家のすぐ近くです。父は鶏龍山いうところに連れて行って、弁論大会の練習を強制したのです。昔の政治家は「諸君!」とやりましたね。あれを僕に強制したのです。で「史朗、原稿を持って行ってはだめだ」と強制しました。中学校1年生だったので、とても不安でした。初めて人前で話すのですから。「もし、原稿を忘れたらどうするの?」とおやじに手を合わせて懇願しました。「僕絶対に原稿を見ないから、一応持って行かせて」。その時父親は何と言ったかという、「大丈夫、自分を信じろ、大丈夫、大丈夫」と何度も言いました。あまりにも父親が自信を持って言うものですから、ついついその気になって、大丈夫だと信じて、「諸君!」とやったら、全校生徒が爆笑したのです。あまりにも、似合わなかったのです。1年生ですから、ヒゲはまだはやしていませんよ。可愛い男の子とは言えませんが。卒業アルバムにその写真が載っていて、「絶唱」と書いてありました。あまりにも、インパクトがあったのです。ところが、「諸君!」とやって、全校生徒がワーッと笑って、パニックになりました。「お父ちゃん、大丈夫でない」と思ったのですが、間に合いません、原稿がないのですから。どれくらいの間、パニックになったのか分かりませんが、しばらくしたら、「大丈夫」という言葉が腹の底から湧いてきたのです。すると忘れていた原稿をすっかり思い出しました。あの一瞬に自分の人生は大丈夫ということになったのです。あんなに、ピンチになったのに大丈夫だったではないか。その他にもピンチはずいぶんありましたけれども、全部、これが救ってくれました。

つまり、人間力の一番大事なものは信念。原田隆史さんは遅刻者をゼロにした人ですね。この教師は陸上競技で13年優勝を続けたのです。大阪で一番荒れている学校が13年陸上競技で全国優勝したのです。入って来た時は心も身体ももやしっ子です。ところが、入学して来たその日に3年後の全国優勝の時のホテルを予約してしまうのです。むちゃくちゃです。夢を持たせるのです。目標を持たせるのです。呉大学の教育方針を見ておりましたら、教育方針の展開というところに、「主体的に生きる人間」「エネルギーに満ち溢れる自己活力」というのがあります。エネルギーというのはどこから出てきますか。エネルギーは、信念とか情熱とか志とか目標というものがないと、エネルギーは湧いてきません。最近の子に目立つのは、「気力がない」「目標がない」「5年生きて疲れちゃった」。目標がないと、意欲が湧いてきません。

野口健という人を知っていますか。登山家で野口健という人がいますね。私、来月一緒に対談をするのですが、この方は高校まで、不良のレッテルを貼られた落ちこぼれでした。勉強してなかったんで、大学に合格しない、そこで、亜細亜大学の一芸入試に挑戦したのです。一芸入試というのは、一つのところに卓越していたら、総合点では負けるかもしれないが、一つの個性で突破できるというものです。「就職力」「専門力」というのを呉大学の方針で読ませていただきましたが、この人の場合は何が専門かという、それは、夢なのです。誰も持っていないものは夢だったのです。その時、彼はこう言ったのです。「私を亜細亜大学に入れてくれたら、こうなります」と言ったのです。「1990年8月にはヨーロッパ大陸モンブランに登頂します。12月にアフリカ大陸に登頂します。92年9月にはオーストラリア大陸。12月には南米、93年6月には北米、94年12月には南極、96年1月にはロシア、97年8月にはアジアのチョモランマに登頂します」と言ったら、試験官が「うわあーすごい」と拍手をして、入れてしまったのです。ところが、彼は全部実行したのです。そして、こう言いました。「いつも、背伸びをすれば、いつかは背が伸びる」。説得力がありますよ。

イチロー選手が小学校時代に書いた「僕の夢」という作文があります。ちょっと読んでみますね。「僕の夢は一流のプロ野球選手になることです。そのためには、中学、高校と全国大会に出て活躍しなければなりません。活躍できるようにな

るためには、練習が必要です。僕は3歳の時から練習を始めています。3年生の時からは365日中360日激しい練習をやっています。だから、1週間で友達と遊べるのは5、6時間です。そんなに練習をやっているのだから、必ず、プロ野球の選手になれると思います。そして、中学、高校と活躍して、高校を卒業してからプロに入団するつもりです。その球団は中日ドラゴンズか西武ライオンズです。ドラフト入団で、契約金は1億円以上が目標です」。小学校時代に1億円以上という目標を立てているのです。今日、広島に来る新幹線の中で、ニュースを見ていましたら、「イチロー選手が1安打打って、3割5分1厘」と出ていましたね。今、大リーグで首位を争う大スターですね。小学校時代から夢を持っていたから、だから、これからは、夢というのが育てられるかどうか、夢や目標があって、目標に向かって課題を設定していくことが大事。

原田隆史先生は僕にこういいました。「先生、全国2位になるのは、簡単」「どうして?」と聞くと、「それは、スキルを教えれば簡単です。技術をね」、砲丸投げ、走り幅跳び、そこにはコツがあるのです。それを徹底的にスパルタ的に教え込めば、技術はマスターできる。でも、「全国一を10年間続けるには、壁がある」「どんな壁?」と聞くと、「心を鍛えるという壁」だと言うのです。最後に勝つと思うか、負けると思うか。ウィンブルドンでもそうですね。最後の決勝戦は精神力なのです。バレーボールでもそうです。ゴルフもそうだと思いますね。最後は自分の心がプラス指向かマイナス指向か、これが大きな要素なのです。

運というのは、たまたま幸運に恵まれるのではなくて、運を引き寄せる心の姿勢を持っているかどうかですね。人間力というのは、そのような意味では、エネルギーに満ち溢れているという言葉がありました。信念、情熱。全国一を続けるために彼が、言い続けてきたことは、彼は中学生にいつもこう言ったのです。「一寸先は闇」と、これは根拠がありません。「一寸先は光」というのが、常識ですね。でも彼は「一寸先は光」と信じているのです。私のオヤジは「大丈夫」というのを信じているのです。どこにも根拠などないのです。今、私のゼミの学生が教員試験を受ける前の週に私のところに来て、「先生、大丈夫と書いてください」とお守りのようにして受験してい

ます。そして、その後、教員になったら、「大丈夫」という言葉を子どもたちに授けているのですけれども。

そのような、肯定的な言葉ですね。今日は看護の学生が多いのですが、病んでいる方のお世話をしながら、病んでいる方の心をどう看るか、宮本武蔵が「見の目弱く、観の目強く」という言葉を使っていますが、これは、宮本武蔵の『五輪書』「水の巻」の一節なのです。宮本武蔵は『五輪書』「水の巻」で心の目で見えることを第一にして、肉体の目で見えることを第二にしろと。

乙武君は今年の3月まで、明星大学の通信教育部の学生でした。今、杉並区の小学校で教えています。彼が書いた『五体不満足』という本、多くの方が読んでいます。その中で、乙武君のお母さんと1カ月間対面することをさせないで、1カ月経って初めて我が子と対面した。その時、お母さんの口から出た言葉は「可愛い」という言葉だったと書いてあります。重い障害を持った我が子を見て、もし、涙をボロボロ流して「可哀想に」と泣いたら、子どもは惨めでしょう。つまり、子どもをどう見るか。患者をどう見るかが患者に大きな影響を与えます。あの時、乙武君のお母さんは命の本質を見ました。現象の障害ではなく、いのちの本質を観たのです。

■ 困難があるから、ありがたい

私は全国を回っているのですが、横浜に仏教慈徳学園というのがありまして、全身入れ墨をしている等の非行少年が、家庭環境が悪すぎるために、その施設に裁判所が指定して入れる施設です。そこで、何をやっているかという、銘石という自然石の傷を毎日6時間磨いているのです。石の傷を毎日6時間磨きながら、弁護士になったり、お医者さんになったり、考えられないような自己実現を遂げているのです。目に見える石の傷を磨きながら、実は目に見えない心の傷を磨いているのです。

今日、広島で荒れている学校の話は3つ目が途中で終わっていますけれども、実は、親がウワーと文句を言って来る。親に対して、山広先生は「あなたたちが変わらないと、子どもは変わりません。一緒に手でトイレ掃除をしましょう」と親に呼びかけたのです。300人以上が参加しました。すごいでしょ？ こんなに参加するということ

は、校長先生がどんなに迫力を持って親に話したかです。どんなに学校が頑張ったって、どんなに教師が頑張ったって、限界があるのです。あなたが変わらないと、子どもは変わりません。だから、親と一緒に、手でトイレ掃除をするということをしたのです。一気に変わりました。

体験活動といっても、大人が子どもに「しろ」と命令してもだめですね。一緒に困難を乗り越えるという体験が絆を深めるのです。「師範塾」では萩往還という、吉田松陰が歩いた34キロを親子で歩いてもらおう、と一緒に歩いています。親子で歩きますと、最初は教師である親が偉そうな顔をしているのです。ところが、休憩時間になると、逆転しますね。子どもたちは休憩しないで遊んでいるので、終わったとき、子どもたちは「しまった、休むの忘れてた」と反省しています。終わった後、午後から親が疲れて来て「お父ちゃん頑張ってる」と言っています。

困難を乗り越える体験が大事です。北海道に北海道家庭学校というのがあります。昔は男子の教護院だったのですが、手錠をはめて腰紐を付けられた非行少年が連れられて来るのです。校門の前で、手錠を解かれて、腰紐を解かれて、130万坪の大自然で立ち直って行くのです。真ん中に教会が建ってまして、教会に入ると十字架はありません。十字架の代わりに「難有」という言葉が掲げられているのです。「どういう意味ですか？」と聞いたら、「困難があるから、有難い」という感謝の気持ちが生まれるのだと。これも、今日のキーワードですね。困難を乗り越えることによって、ありがたいという、感謝の気持ちになるのだと。そのような意味から言えば、重度の脳性小児麻痺や重度の障害を持った子どものお母さんがその困難があるから、ありがたいという気持ちが育っていくのです。困難を乗り越えるということが、大きな要素になる訳です。

長島一茂が一時通っていた、白根開善学校というところがあります。ここには、100キロ競歩というのがあります。100キロ歩くと、みんな泣きながら、ゴールインします。それは、辛くて、悲しくて泣いているのではないのです。生まれて初めて自分に感激して泣いているのです。途中で挫折しそうになった。マメができて、もう限界だ、でも、その困難を乗り越えて、僕だってヒーローだと、自分に感激して泣いているのです。自分に感激するという機会がなかなかありません。それ

は、教育界は事なかれ主義、安全第一主義で、そういう困難を乗り越えるという挑戦を避けようとしているからです。HQ、人間性知性を高める方法として、1つは多様な人間関係が大切だと言いました。2番目には、直接体験、本物に出会う体験。

自然体験もそうですが、直接体験というのが、人間性を育てる上で鍵になりますよ、と脳科学の専門家が言っています。あるいは、乳幼児の世話とか、老人介護とか、弱さに関わることです。弱さに関わることで、人間性を高めていく。そして、その他に読書ですね。特に、音読がいいと、これは、川島隆太さんが言っていることですが、埼玉県で白鳥幼稚園という素晴らしい脳科学を教育に取り入れて実践をやっているところがあります。リズム運動を体験しながら、子どもがどんどん元気になっているのです。リズム運動というのは、体操のリズムと言葉のリズムと音楽のリズムです。それを体験する。それが、乳児にどのように影響を与えるのかを、脳科学を導入して研究しているのです。

■ 成就感、成功体験、達成感こそ、次へのエネルギー

実は、昨日遅くまで、日本大学の脳科学の専門家が、13年閉じこもって来た不登校の子どもの脳波を測定するというので立ち会えというので、行ってきました。13年間閉じこもっているとどのような脳の状態になっているか、あるいは、今、愛着というものが、子どもの脳にどのような影響を与えるかについての研究が進んでいます。今日、皆さんにお見せすることはできませんが、例えば、実のお母さんと話している場合と、見知らぬ人と話している場合と全然、脳の活性化が違うのです。情動脳というものが、非常に活発に動くのです。情動というのは、喜怒哀楽です。情動というのは、5歳ぐらいまでにその原型が形成される。これは、文部科学省の脳科学の研究会が提言で発表したことです。

今日は脳科学がサブタイトルですが、なぜ、「親学」と脳科学をセットで議論しているかと言いますと、「親学」というのを、問題提起をしたら、マスコミの一部が批判しました。どういう批判をしたかということ、家庭で、子どもにどう関わるかというのは、個人の価値観による。それを、国や

行政がこうあるべきだと押し付けるのは余計なお世話で、価値観の強制だという批判をしたのです。一番大事な根本が忘れられているのです。「親学」の一番の根本の考え方は、子どもの心や脳の成長、発達をどう保障するか、子どもの脳の発達段階に応じてどう関わるかというのには、普遍的な原理があるのです。

そこで、私たちは「親学の教科書」というものを作りました。一年間、PHP研究所で研究を重ねました。私が主査をさせていただいて、『親と教師が日本を変える』（いずれもPHP刊）という本を出しました。その中で、親学提言というのを出したのです。なぜ、「親学」の提言を出したかということ、理不尽な親が増えている、保育園料、給食費を払わない人が増えている。今日のような講演会でも、前の方に一般の希望者がお集まりになっていると聞いていますが、本当に聞いてほしい親はこのようなところに来ない。いくら、PTAで講演会をやっても、来ないですね。私はその親たちにどう働きかけるかが、この国の将来を左右すると思っています。説得しようとする、逃げて行きます。親はこうあるべきというと、自分が責められているようで、逃げていくのです。

私はどこから始めたかということ、6年前に「悩める親の会」というのを始めたのです。ただ、弱音や愚痴をただ言い合う。これだけでいいのです。孤立している母親は弱音や愚痴をみんなシェアしながら、分かち合い、それが、受け止められたら、ずいぶんすっきりして帰って行かれるのです。まず、そこから始めようと思いました。まず、心を受け止める。しかし、ここで終わってはいけません。今まで、不登校に対する指導も間違っていました。それは、「長い目で見守れ」「信じて待て」「登校刺激を与えるな」と、こうやってきたのです。心を受け止めるというのは、カール・ロジャースの非指示的カウンセリングの原点であるのですが、これが大事なことは言うまでもありません。これは、母性原理に関わるものです。次に、心を伝える。あるいは、不登校児について言えば、成就感、成功体験、達成感を通して、まさに、呉大学の教育方針にある、エネルギーというものは休めば出てくるものではなくて、成就感、達成感、成功体験を通して、大丈夫という、小さな成功体験を通してだんだん元気になってくるのです。

村上和雄さんは、人間の遺伝子は3%しか、ス

スイッチオンになっていないと言い、後の97%はスイッチオフだと言いました。このスイッチオフをオンにするものは何か、感動体験、喜び体験だと言いましたけれども、皆さんに是非、読んでいただきたい本はレイチェル・カーソンの『Sense of Wonder』です。これは、新潮社から出ています。Wonder とは、不思議さとか、神秘さですね。神秘さ、不思議さに目を見張る感性です。レイチェル・カーソンはアメリカの環境問題などで有名な方ですが、こう言っているのです。ちょっと読ませていただきます。「子どもたちの世界は、いつもいきいきとして、いつも、新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまします」。

皆さん、中秋の名月をじっくり見た人はどのくらいいますか？ 少ないですね。なぜか、前の方に偏っているのですが、中秋の名月を見ている暇がない。私はこの間、日曜日でしたかね、夜中の12時ぐらいから見始めて、寝ようと思ったのは3時50分でした。私の人生の中で初めてでしたね。秩父の定峰という山の奥で、私は「守破離亭」というのをつくっているのですが、杉の木とヒノキを伐採しまして、1,000万円くらいかけて、切った木で机と椅子を作って、埼玉師範塾の種々の研修や開塾式をやっているのです。そこは、電線も地中に埋めました。光も全然ないですね。まったく光のないところで、星がものすごくきれいでした。そして、月の光で陰ができるのです。墨絵を見ているようでした。見とれてしまいましたね。机の上にちょっとした椅子を置きまして、ずっと見ていまして、ハッと気がつきまして、3時50分でした。こんなに遅くまで見たことはない。こんなに見入るという世界はなかなかないのです。

レイチェル・カーソンはこのようなことを言っているのです。「わたしはかつて、その夜ほど美しい星空を見たことはありませんでした。空を横切って流れる白いもやのような天の川、きらきらと輝きながらくっきりと見える星座の形、水平線近くに燃えるようにまたたく惑星……。流れ星がひとつ、ふたつ地球の大気圏に飛びこんできて燃えつきまして。わたしはそのとき、もし、このながめが1世紀に1回か、あるいは人間の一生のうちにたった1回しか見られないものだとした

ら、この小さな岬は見物人で溢れてしまうだろうと考えました。しかし、同じ光景は毎年何十回も見ることができます。そして、そこに住む人々は頭上の美しさを気にもとめません。見ようと思えばほとんど毎晩見ることができるために、おそらく、一度もみることがないのです」。

今、子どもたちの感性が危うくなってきました。私が新潟で子どもの合宿をやったのです。都会生まれの都会育ちの子どもたちに、夜中、寝ころがって、星空を見せていました。そしたら、ある子がこう言ったのですね。「空にじん麻疹ができたみたいで気持ちが悪い」と言ったのです。日本人の感性が危ない。日本人はこの大自然の中で美しい感性が育まれてきたのです。角田忠信という人が『日本人の脳』という本を書いています。東ヨーロッパで学会があり、ガーデンパーティーが開かれた。虫の音が美しかったので、「虫の音が聞こえますね」と言ったら、「聞こえない」と。「あなたはストレスが溜まっているから、幻聴で聞こえているのだ、だから、早くホテルの部屋に入ってお休みなさい」と言われたと、書いています。

虫の声とか、月とか、そのようなものを味わうのは感性です。日本人の脳と外国人の脳は違うと言われておりますけれども、私は感性・脳科学教育研究会を3年前につくっていますが、重度の障害児で、4年間まったく反応がなかった子が和太鼓を叩いた瞬間に、手が動いたのです。その瞬間の映像をパワーポイントの映像で養護学校の先生が見せてくれました。感動的な場面でした。ある学級崩壊している学級の低学年の子ども全員に和太鼓を持たせた。そして、一人の子が叩く。次の子が同じように叩く、これを同じように繰り返しながら、だんだん共感性が広がってきました。そして、自分をしっかりと見つめられるようになりました。学級崩壊が見事に解決しました。

あるいは、教育再生会議で報告したのですが、ある中学校の校長が茶道をやっていました。全教職員に茶道を学ばせて、総合学習を通じて1年間全中学生に茶道を教えました。1年間を通して、どんなことを感じたかという質問に、一番多かった感想は「自分をしっかりと見つめられるようになりました」「友達に対して、とても温かい気持ちを持てるようになりました」。つまり、茶道という日本の伝統文化の実践を通じて、人間力が育ったのです。自己制御能力と対人関係能力が育った

のです。文科省の体験学習の調査を通じて、このようなことが分かっています。社会体験とか、自然体験とか、体験が豊かな子どもほど規範意識が高い。基本的な生活習慣ができています。こういう結果が出ていますね。

■ 教育とは人間の持つ自然治癒力を引き出すこと

これから、体験を通して人間力というものを育んでいくということが、大事な課題になってくるでしょう。その時に問題になるのは、教育者の感性です。大自然にいれば、子どもの感性が育つ訳ではありません。レイチェル・カーソンはこう言っているのです。「子どもの感性が育つためには、感動を分かち合う、大人が少なくとも一人側にいる必要がある」「きれいな花だね」と言って、働きかける存在が必要です。今日の看護学部の方たちはどのように、患者に語りかけるか、働きかけるかが大事なのです。そのために自分自身の感性が問われます。自分自身が生き生きわくわくしていることが大切です。

私は河合隼雄先生のお兄さんの河合雅雄先生というサル学者の先生とお会いしたことがあるのですが、犬山のセンターからチンパンジーが逃げ出した。若い皆さんは知らないと思いますが、その時、河合雅雄さんは、マスコミから逃げて、プレスセンタービルの一番上のアラスカというレストランで私と食事をしていたのです。いきなり先生が私に言ったのです。「日比谷公園の街路樹の名前言える?」。私は言えなかったのです。恥ずかしかったのですが。

日本人は自然愛好民族だというのが、ウソだと。みんな、分析ばかりしている。先生たちはおしべがどうなっている、めしべはどうなっていると、分析ばかりしているけど、感動していない。感動をしないで、どうやって子どもの心を育てることができるか。教育する側が感動していなければ、子どもを感動させることは不可能である。私は『ホーリズムと進化』という本を3人で翻訳したのですが、石川光男という方がいらっしゃいます。この方は私と『ホリスティック医学と教育』という本を出しているのですが、この方はホリスティック医学協会の理事もされている方で、その本の中で彼はこう言いました。「体験を通して感性を育てることの大事さはその通りなのだけれど、自分の専門は理科なので、理科や数学を通し

て感性を育てることも大切だ」と。

彼は、「理観」ということについて、説明したのです。是非、『ホリスティック医学と教育』という本を見ていただきたいと思うのですが、その中で、この先生がどのようなことを言ったかは、ここに出ています。彼は、胃の中の細胞の話をしました。胃の細胞を見ていると、死んだ細胞の群れが堆積することによって胃壁を覆って酸からなり、新しい細胞が生まれるまでの膜間つなぎをしている。死と生のダイナミックな関係についていろいろ説明しまして、そういう、理を観じさせることが大事だと言いました。理観というのは、理を観じさせることなのですが、胃の細胞を分析しながら、分析知を通して、感動に導く。命の感動に導く、命の感動を通して、もっと深く分析していく。これが感知合流ですね。感性と知性を合流させる、感知合流の教育が大事なのだと言いました。

私はホリスティック教育に関する本も幾つか書いていますが、ノーベル賞を受賞したプリゴジンという方が「散逸構造論」という論文を書いて、1978年にアメリカでホリスティック医学協会というのができました。日本では1987年に同協会ができていますが、その根本には、このプリゴジンの散逸構造論というのがある。医者が患者を治してやるのではないのだ。患者が主役で医者は脇役なのだ。人間にも自然にも自然治癒力というものがある。その自然治癒力を活性化することが大事なのだ、という考えです。

西洋医学は肉体の部分进行分析して、肉体の部分に薬を投与して治そうという発想。東洋医学は、例えば、凝っているところに鍼を刺して、全体の命の活性化を促すというものですが、この全体と部分を統合するのがホリスティック医学という問題意識なのです。要素還元主義に陥った近代西洋医学を超えるために「日本統合医療学会」も設立されました。もともと自然には自然治癒力があって、トカゲの尻尾は切ってもドンドン生えてきますね。それは誰かが治してやるのではなくて、もともと自然治癒力が内在している。子どもたちにも全ての人間に自然治癒力が内在している。自然治癒力が回復するというのが、病気から回復するということなのだ。だから、医者が治してやるのではなく、患者の気づきを深めることによって、その自然治癒力を引き出してくるのが大事だ、と。

教育もそのように考えてくると、生きる力とい

うものは、誰かが与えるものではなく、もともとあるものに、どのように気づかせてあげるか。子どもが持っている、自然治癒力をどのように引き出していくかが、これが大事なこれからの教育問題ではないかと思います。そして、ホリスティック教育のキーワードである「主体変容」というの

は、伝達する、交流するに続くパラダイムで、3つ目が主体変容。まず自分が変わるということですね。

もう、時間になりましたので、これで、終わらせていただきます。また、みなさんとお会いできる機会があればと願っています。